

氏も指摘して居られ、殷の遺民の役割を強調したのは必ずしも博士ばかりではないが、併しその證明の方法に至つては全然別のものであり、商の字が古くは國名にしか用ひられなかつたと及びこの字のみがその他の經濟的意味を持つ文字と異り、且に従はないことを以て、商賈の商は即ち殷の遺民の稱なりとするのである。

「支那文字の訓詁に於ける矛盾の統一」も博士の卓抜な創見の一つである。

「支那の學問の固定性と漢代以後の社會」では、漢の武帝が諸思想を排して儒學に統一したのは學者の輿論を封する爲の手段であり、武帝は支那の學問を飼ひ殺しにした張本人だといふ通説をはなれて、むしろ當時の社會狀態、特に經濟狀態が然らしめたもので、當時の士人階級がむしろ之を欲したのであること、漢以後の學問の固定は即ち支那の社會の固定によるものであることを指摘される。飽くまでも社會經濟と結びつけようとする。博士の一流の考へ方である。

博士の考へによれば支那の思想史は徹頭徹尾社會思想の發達の歴史である。道德法律經濟政治等を含む廣義の社會現象に關する思想のみが支那では發達したとするのである。これは本書を通じて明確に「貫せる考へ方である。この考へ方に従つて「支那古代の社會經濟思想」の長篇は集大成されてゐる。而も支那に於ては古代のみならず清朝に至る迄この風潮は一貫して居るとして清朝の學者の社會改良説をも一々擧げて居られる所に

博士の周到な用意がある。木村英一氏もいはれる如くこの一篇は「先生の今迄發表されたものの中で最も高いもの」だと私も思はれる。

武内義雄博士の「支那思想史」(岩波全書)には公平に見て到底小島博士の如き確固たる信念はない様に見受けられる。武内博士の立場を臆測するに、博士の思想史は支那人の精神生活の歴史である。文學とは種類こそ異なれ凡そ人間の精神生活を豊かにするものが思想である。従て博士では曾て支那人の頭を賑はした所のものは何でも取り入れられる。佛教思想及びその影響が中世近世に於て重んぜられる所以である。同じく京都帝大系のこの二人の碩學の思想觀を對照して見るのは誠に興味深いものがある。(内藤戊申)

シベリア諸民族のシャーマン教

ニオラツツエ原著
牧野弘一譯

B 6版一七〇頁 昭和十八年四月
生活社發行 定價貳圓五拾錢

本書の著者はボーランド人であり、原題名は "Shamanismus bei den sibirischen Völkern" といひ一九二五年の刊行になる。今回牧野弘一氏による邦譯が、公刊されたが、その内容は「シャーマン教的世界觀」「シャーマン」の二章に大別される。「シャーマン教的世界觀」の章は

葬儀、他界、生靈に就ての思想、人間の死後に於ける靈魂の狀態、精靈、物・植物及び動物と精靈との結合、疾病・死及びあらゆる不運の根源

の諸項より成り、「シャーマン」の章は

シャーマンの個人的資格、家族シャーマンの資格、シャーマンの心理、シャーマン界に於ける女性の地位、シャーマンの資格と修行、若きシャーマンの許可、シャーマンの衣裳、シャーマンの装束の意義、シャーマンの種類、變性シャーマン、シャーマンの職能、シャーマンの所作及び詩作、シャーマンの自信とその力に對する信念、民族に於けるシャーマンの地位とその葬式。

の諸項を含んでゐる。圖版・挿圖も可成豊富であり、貴重なものも含まれ、本文をよく補つてゐる。シベリヤのシャーマン教に關する文獻は極めて多いが、就中、長期に亘りシャーマン教徒の間に生活する機會をもちシャーマン教に就いて透徹した探求を行つたロシア人學徒の研究を以て筆頭に推さねばならぬ。かゝる研究の成果を可成の程度に驅使したことに一應本書のよさを認めねばならない。とはいふものの、本書の内容は常に正確なるを保し難いのであり、シャーマンの原義に關する Poppe の批判は姑く措くとしても (Asia Major. II. 1926) ニオラツエがシャーマンに三類の發展段階——個人的シャーマン・家族的シャーマン・職業的シャーマン——を設定したのに對して Augustin を始めとして (Anthropos. Bd. XXII. Ht. 3

4. 1927) 赤松智城博士 (宗教研究新六ノ三所載北方民族の巫術の起源について・滿蒙の民族と宗教總説・棚瀬襄爾氏 (民族宗教の研究第一部第四章) の批判のある所であつて、かゝる段階發展説は到底是認され得ないのである。斯の如く本書は必しも瑕瑾なしとは言ひ得ないのであるけれども、一般讀書界にシベリヤシャーマン教の概要を與へるためには恰好のものであり、その意味に於いて推奨さるべきであらう。秋葉隆教授の序文に見える如く、同じくポーランド人にしてシベリヤシャーマン教研究に進んだ Caplika 女史の著作が比較的早くから本邦學界に知られてゐるのに對して、本書はそれ程には讀まれてゐないやうである。この缺陷を補ふものとして牧野氏の邦譯刊行は意義付けられるのであり、入門書としての本書の價値は十分活用さるべきであらう。なほ、卷末の文獻表はロシア文獻を數多く擧げて居り、目錄として重寶なものである。〔岡崎精郎〕

支那旅行日記

上卷

リヒトホーフエン著
海老原正雄譯

昭和十八年五月 慶應書房發行
A5判四二二頁 定價五圓貳拾錢

本書はリヒトホーフエンの死後、彼が支那で行つた一八六八年以降足掛五年の地質學的踏査の際の日記を更に原稿や手紙によつて補綴して編輯刊行せられた「Jagebücher aus China」(Hg. V. C. Jæssen, I Bände, 1907) の全譯本中の第一冊であらう。